



神保町—近代のあゆみ

千代田区立日比谷図書文化財事務室 学芸員 長谷川 怜様

紹介者 八木 壮一委員長

神保町と聞けば、多くの人は条件反射的に“古書の街”を想像することでしょう。実際のところ、日本一、いや世界一の古書店街として神保町は有名で、日々多くの人がお気に入りの一冊を求めてこの街を訪れています。

今回は近代に焦点を当て、神田地域の中における神保町の街の位置づけや特徴、神保町に存在した教育機関や娯楽施設、下宿、旅館といった施設のこと、そして本の街としての発展、中国人留學生が集まる街としての側面など、様々な角度から神保町の魅力に迫ります。

1. 神保町の由来と成り立ち

神保町が所在する神田地域は、かつて御戸代(みとしろ)と呼称されていました。皇(こう)大神宮(たいじんぐう)(伊勢神宮の内宮)に奉納する新稲の御料地であったことから、神田(みた、かんだ)と呼ばれるようになりました。江戸時代になると武家屋敷が建ち並び、付近には阿部伊代守、土井能登守、松平駿河守などの大名屋敷がありました。そして、元禄2年(1689)に現在の神田神保町2丁目付近に屋敷を拝領した神保長治の名前が神保町の由来となりました。

明治維新後、東京には大区小区制が敷かれ、現在の神保町のある場所は第4大区1小区・2小区となりました。その後、市制施行によって明治22年(1889)に東京市神田区に含まれました。神田地域には、江戸時代の武家屋敷や火除け地など広い土地が多かったため、各種の学校(明治法律学校や日本法律学校、専修学校など)が設立され、周辺には学生を対象とした下宿が建ち並びました。また、教科書や参考書売る古書店が徐々に増え、後の神保町古書店街形成の基盤となりました。

現在、神保町(町名としては神田神保町)はもちろん1つですが、かつては表神保町、裏神保町、南神保町、北神保町の4つが存在していました。これら4つに、かつての中猿楽町、猿楽町、今川小路、一ツ橋通町、小出河岸を加えた範囲が現在の神田神保町です。

2. 神保町の街の様子

神保町には、教育機関、勸(かん)工場(こうば)、貸席、旅館、カフェ、映画館、病院など様々な施設がありました。

勸工場は現在のデパートにあたる施設で、洽集館(こうしゅうかん)、東明館、南明館が開店しました。勸工場の中には生活用品、文具に衣服などとりどりの商品が並び、また楽隊やダンサーによる演奏も行われ、人々の購買意欲を誘いました。三階建て建築で有名だった旅館の旭楼、感染症の治療を行った病院の神保院、神田日活館や東洋キネマといった映画館など、神保町はあらゆる要素が詰まった街でした。当時の新聞や回想録には、街路に古本屋と商店、飲

食店、カフェがひしめき、「不夜城」とも呼ばれて賑わった様子がたびたび登場します。

3. 大火に襲われる神保町

「火事と喧嘩は江戸の華」と言われますが、明治維新後も神田地域は何度も火災に襲われます。明治13年(1880)、14年、25年(1892)、大正2年(1913)の火事が知られていますが、特に大正2年の火事は大きく、神保町一帯も大変な被害を受けました。

4. 留學生の街・神保町

明治から大正期にかけての神保町は、中国人留學生の街という側面を持っていました。神保町には従来、下宿と書店が多く学生街として発達しており、また留學生向けの日本語学校もあったため中国人(清国人)留學生が集住することになりました。留學生の増加に伴って中華料理店も次々にオープンしました。後に著名な政治家となる周恩来や汪兆銘なども神保町で学んでいました。

5. 関東大震災と太平洋戦争

数々の大火をくぐり抜け、その都度再び立ち上がってきた神保町をまたもや大きな災害が襲いました。大正12年(1923)の関東大震災です。この未曾有の災害によって、神保町一帯は焼け野原となりました。しかし、人々は立ち上がり、直後から復興の槌音が聞こえました。帝都復興計画で九段坂の勾配が緩やかになり、拡幅された靖国通りと接続されると、神保町はそれ以前にも増して交通の便がよくなり、街には賑わいが戻りました。当時の東京観光バスのパンフレットには「神保町古書店街」の文字があり、この街が観光地としても注目されていたことを伝えています。

しかし、震災による目覚ましい復興、街の賑わいもつかの間のこと、昭和になると日本をとりまく国際環境は極度に悪化します。昭和16年(1941)には太平洋戦争がはじまり、戦局の悪化に伴って東京は空襲の標的となりました。昭和20年3月には下町を狙った大空襲があり、神田地域のほとんどは焼失しますが、奇跡的に神保町は被害を免れました。広い街路(靖国通り)、北の丸(皇居)、日本橋川が防火隊の役割を果たしたことに加え、当日の風向きも神保町の焼失を防ぐことに寄与したのでしょうか。ところで、文芸評論家の野田宇太郎は、セルゲイ・エリセーフというロシア人学者の進言によって神保町が意図的に空襲の標的から外されたという説を提示していますが、その真偽は明らかではありません。明治時代以降、神保町は激動の時代を乗り越え、現在まで街の賑わいが続いています。まだまだ知られざるエピソードや、興味深い事実は多く、これからも神保町の歴史を探り続けたいと思っています。